松井進平先生のこと

吉　岡　健　一

松井先生は三河のご出身で，信長，秀吉，家康が戦った古戦場で少年時代を過ごされた。そういえば，先生の独特の話しぶりと笑い方には戦国武士を思わせる風格がある。

本学の英文学科を1955年に卒業され，京都府の公立高校に勤めておられたが，1963年京都府公立高校の研修員として１年間大学院の講義を受けられた。たまたまその年に私が大学院に入学し，岩倉先生の言語学の講義に松井先生とご一緒した。その頃はアメリカ構造言語学の最盛時代で，新町校舎で行われた日本英文学会における言語学関係の発表やシンポジアムの内容もほとんど構造言語学を中心としたものであった。岩倉先生の講義でも当然のこととして，Bloomfield の*Language* をテクストに使うことになった。*Language* は当時構造言語学のバイブルとも言うべきものであったが，何しろ大著で，おまけに 'immediate constituents' といったような新しい用語が続出し，統語論でも意味を除外するという考え方は，伝統文法で育った私には理解を超えるものであった。岩倉先生は明治の元勲岩倉具視の曾孫にあたられるとかいうことで，夏でも麻のスーツを着用され，まことに春風駘蕩としたお人柄であった。おかげで出来の悪い私もお叱りを受けずなんとか１年を過ごすことができた。その中で，松井先生は早くから音韻論の勉強をされていたのであろう（アメリカの構造主義では音韻論が出発点である）。クラスでのテクストに関する議論ではいつも的確な意見を述べておられた。

その後先生は Georgetown University とハワイの East-West Center に留学された。帰国されてまもなく追手門学院大学に移られたが，この間，音韻論を

中心とした研究に従事され，いくつかの論文を発表されている。

1974年先生は同志社に移られた。約10年ぶりの再会であった。低音のよく通る声で慎重に話をされる様子や急に大声で笑われる様子は昔と少しも変わっていなかった。同志社でも音韻論の研究（『音声学大辞典』（1976）および，*A Grand Dictionary of Phonetics*（1981）に執筆）を続けられる一方，その成果を英語教育に適用するため，文部省科研助成費による共同研究「外国語としての英語の Hearing 能力の形成要因の実証的研究」（1978年度）を発表されている。その他在外研究，「英語教材としての旧約聖書研究」の共同研究，英検の出題委員，学内では組合の委員長等実に忙しい毎日であったように思う。

何年か前，先生を交えた数人で英文法のテクストを作ったことがあった。当時先生は英語科の科目主任をされており，ご多忙であったため出席はままならなかったが，最終原稿を丹念にお読みになり多くのアドバイスをいただいた。わが国の英文法界は伝統文法（学校文法を含む），構造主義文法，変形生成文法と大きく変遷してきたが，先生はその変遷のうねりのまっただ中に身を置かれた方である。こうした経験をふまえて，大局的な英語教育の観点に立って英文法のテクストを編集しなければならないと力説されていた。先生は名著の誉れ高い Quirk, Greenbaum *et al*, *A Grammar of Contemporary English* の立場に近いのではないかと思う。

以前，英語科で年に一度全員でバス旅行をしていた。行き先は幹事の先生の故郷であることが多かった。松井先生が幹事の時は当然三河地方であった。先生はご自分の故郷のここも案内したい，あそこも案内したいと思って相当悩まれ，スケヂュールが容易に決まらなかったようである。先生とはそういう方である。英文法の分野と同様に，先生は戦争，敗戦，学制改革という激変の中で多感な時代を過ごされた。年齢は近いが私とは違う決定的な点はこうした経験の濃度の違いかもしれない。闘志を秘めながらも抱擁力のある松井先生が去っていかれるのは寂しい限りである。ただ，先生と共同で行って

いる文部省科研助成費による研究が来年度も継続するため，ご定年後もしばしばお会いすることは幸いである。